

では面白いが、ファクトではない。

中には「オタワ大学のイヴァン・カチャノフスキーの論文を読め」という人までいた。トマネク副所長らに確認すると、親ロシア派のカチャノフスキーは、反

証があるにもかかわらず、捏造論文を拡散するところでもない陰謀論者だという。ロシアのプロパガンダにはくれぐれも気を付けたい。

(さきかわ・しんいちろう、ジャーナリスト、本会会員)

グラジナ・バツェヴィチのピアノ・ソナタ第1番 ～日本初演へ～

徳田 貴子

昨年『現代ポーランド音楽の100年～シマノフスキからペンデレツキまで』（グヴィズダランカ著）が出版され、POLE112号で高橋健一郎先生が紹介されたので、ショパン以降の現代ポーランド音楽に興味を持った方も増えたことだろう。



ポーランド音楽におけるファーストレディ

この本の中では、女性作曲家として成功したグラジナ・バツェヴィチ (Grażyna Bacewicz, 1909～69) がしばしば取り上げられている。ワルシャワの国立高等音楽学校(現ショパン音楽大学)教授にまで上り詰め、ポーランド作曲家連合(Polish Composers' Union)の副会長を務め「ポーランド音楽におけるファーストレディ」と称された彼女の作品に興味を持った方もいらっしゃるかもしれない。

彼女のピアノ作品としては、1953年に作曲されたピアノ・ソナタ第2番が有名である。この作品は不安定な調性の中でも明確に主張がある第1楽章、ポーランド民謡を思い起こさせる第2楽章、ポーランドの踊り、オベレックに乗せて駆け抜ける第3楽章からなる。常に不安定な雰囲気をつづけているこの曲は、当時のポーランド音楽の世相を反映しているといえよう。1949～53年まで作曲家たちはソ連の提唱する「社会主義リアリズム」の教条のもと、より大衆にわかりやすくポーランド的な音楽を作曲するよう強制されていた。この社会主義リアリズムの統制を意識しつつも、第2番では明らかに反抗した表現が展開されている。彼女自身の言葉を借りれば、石に「彫刻」するかのよう、1音たりとも無駄なく意味を持った本作品は、現在、世界的にも注目が高まっている。

幻のピアノ・ソナタ第1番

一方、ソナタ第1番はあまり世に知られていない。というより、第1番は2022年まで未出版で、幻の作品だった。作曲された1949年から72年の時を経て、一昨年ようやく世に送り出されたのである。第1番は、統制を超えてより自由に表現しようとした第2番とは対照的で、伝統的な形式に則って作曲されており、調性もより明確で親しみやすい。ポーランドの踊りのリズムやポーランドらしい音程を含む旋律が大きなスケールで表現され、大衆にわかりやす

い音楽になっている。1949年は社会主義リアリズムの教条が作曲家に課された最初の年なので、バツェヴィチもそれを意識したのだろう。

けれども、第1番の表現がそれだけに尽きるとはいえない。第2番において際立つことになる「モーターのような」書法や「遠近感を感じさせる」書法は第1番でも用いられており、彼女の個性が感じられる。また、特徴的な書法を用いて社会主義リアリズムに歯向かっていくような主張は、実は第1番でもなされている。だが、その主張は長続きせず、結果的に伝統的な形式に収まっている。その過程は悔しさを感じさせ、結果としてこの曲にしか存在しない美しさを作り出している。

私は大学院博士課程で、学位論文のテーマとしてバツェヴィチの作品を研究した。その過程でソナタ第1番の原稿がポーランド国立図書館に眠っているらしいことを知り、幻の第1番の存在を知った。楽譜のデータを入手し実際に自分で弾いてみて、第2番とは違う美しさやスケルツォ的なキャラクターがある第1番に魅せられた。

日本初演へ



このたび、紆余曲折を経て第1番が出版され、公的に演奏できるようになったので、このソナタ第1番を、第2番とともに10月25日の札幌市民劇場公演にて演奏する予定である。第1番は日本初演となる。

= G. Bacewicz = 写真家 Andrzej Zborski,
ポーランド作曲家連合コレクションより

多くの方々に、幻だった作品をぜひ聞いていただき、困難な時代にも個性を持って創作活動を続けた作曲家がいたことを知っていただきたい。

次号では、グラジナ・バツェヴィチの生涯を辿る予定である。(とくだ・たかこ、ピアニスト、本会会員)